

2. 事業の目的と概要	
(1) 上位目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 教育(教室不足)環境の改善 2. トイレや排水溝等衛生環境の改善 3. 地域の待機児童生徒の救済 4. 建物の維持管理のため地域コミュニティの組織化
(2) 事業の必要性(背景)	<p>2008年5月2日のミャンマー・サイクロン“ナルギス”が未曾有の災害をもたらし、ヤンゴン管区タケタ地区も大きな被害を受けた。</p> <p>ナマウ僧院附属タケタ No. 1 小中学校も多大な被害を受けた。屋根のトタンは飛び、壁の一部は剥がれ、あり合わせの資材で応急処置を行っているが、天井は剥がれたままで、学習環境は劣悪な状況にある。</p> <p>既存の校舎は木造2階建て、1階は1部屋(仕切り無し)で、生徒は129名(小学生1年生～5年生)が、すし詰め状態で授業を受けているが光のない薄暗い所で学習している。</p> <p>1階軒下2ヶ所を簡易な教室にして57名(小学1年生～2年生)が授業を受けているが、学習する環境とは言えない。この建物の2階は、小僧の宿舎になっている。</p> <p>また、別棟(スイス人建設)木造平屋建て4教室に122名の中学生が学んでいるが、この他、教室不足のため約100名の中学生を他の2校に預けている。</p> <p>更に僧院近辺の、主に貧困家庭の子ども達約50名が就学を希望しているが、教室が足りない事を事由で断っている。</p> <p>他に既存のトイレでは不衛生面を考慮して新しいトイレも必要である。</p> <p>このような僧院附属学校の現状を踏まえ、僧侶や地域コミュニティと平成21年8月から6回程、僧院附属学校の状況を視察・確認すると共に僧侶並びに地域コミュニティの方を交えて意見交換を重ね、子ども達の学習環境の改善や就学できない待機児童生徒の救済など、人づくりについて真剣に協議した。</p> <p>結果、早急に新校舎(トイレ含め)を建設する必要があると結論に達した。</p> <p>新校舎建設後は地域コミュニティが組織を強化して財政を含めて僧院附属学校の運営に当たると確約した。</p>

<p>(3) 事業内容</p>	<p>1. 新校舎の規模は、R.C 構造 2 階建て 8 教室で、新校舎建設と衛生面を考慮してトイレ(5 基)や受水槽、排水溝等も設置する。学校建設は、宗教省並びにヤンゴン管区は R.C 構造を推奨している。</p> <p>学校建設はミャンマー連邦共和国政府の基準に準拠し、施工管理を徹底し、什器備品(内訳:黒板、先生の机・椅子、生徒の机・椅子(1 教室 1 6 組 3 2 名))を設置する。</p> <p>新トイレは 5 基(内訳:男子生徒用 2 基、先生用 1 基、女子生徒用 2 基)新校舎の西側に渡り廊下をつけて新設する。</p> <p>2. 施設の維持・管理及びそのため地域コミュニティ組織化, 並びに教師の指導力向上に関する短期ワークショップを開催する。</p>
<p>(4) 持続発展性</p>	<p>新校舎完成後、僧院学校管理委員会が維持管理に従事する。学校施設が適切に維持管理できる指標を策定する。</p> <p>1. 施設の維持・管理のマニュアルを整備。</p> <p>2. 施設を定期的に点検・補修を実施。</p> <p>3. 施設維持・管理のための資材・資金を確保。</p> <p>※維持管理に必要な財源の確保は既に確認した。</p> <p>主に上記 3 点に関して新校舎完成までに指標等を提示し、協議の結果、策定し僧院学校管理委員会に引き継ぐ。</p> <p>引き継ぎ後は、年 1 回レポート提出、更に定期的にモニタリングを実施する。</p>
<p>(5) 期待される成果と成果を測る指標</p>	<p>1. 物理的な面での教育環境に関する課題を解消する。</p> <p>① 教室が足りない= 8 教室</p> <p>既存の校舎は雑然とした構造の教室になっており、狭くすし詰め状態にある。</p> <p>新校舎完成後は、床面積(5 3 0 m²)が増え、学習環境は大幅に改善され、約 2 6 0 名の学習が可能となる。</p> <p>別棟及び他の 2 校で勉学している約 2 0 0 名と併せ、既存の生徒 4 0 8 名+待機児童生徒約 5 0 名=約 4 6 0 名の就学が可能となり、更に待機児童生徒約 5 0 名の就学が可能となる。</p> <p>したがって、地域の子どもたち全員がタケタ No. 1 小中学校へ通うことが可能になる。</p> <p>② 衛生的なトイレがない= 5 基</p> <p>既存のトイレは校舎から離れている。</p>

新トイレには、浄化槽や給水槽の設備も併設する事で、清潔なトイレができ、不便さを解消する。

2. ミャンマーでは、現在、中学校で4年間勉強して中卒の資格を得られるが、中には3ヶ年課程しかなく、その資格が得られない学校もある。約50名の待機児童生徒のうち、約20名は他地区において3年課程の中学校を卒業した生徒であり、これらの生徒が教室の増設により4年生に編入することができ、中学校修了資格を得ると共に、高校への進学が開かれる。